

# ・ ゆとりの時間を活用した総合活動の試み

学級一点運動——「ふるさとに学ぶ」——

足利市立松田小学校

多 田 一 雄

## 1 はじめに

現行の教育課程が実施されて以来、「ゆとりの時間」が設けられ様々な活動が展開されてきている。各学校で、各学級で展開されている内容をみると、様々なジャンルの活動がなされており、子供達の興味・関心に根ざした実践を行っている学校が少なくない。

わが学級においても、昨年来様々な活動を行ってきた。しかし、その内容は子供の側から出発したものの、子供の内なる姿を表出して全体をはたらかせひとりこんだ活動かというと反省させられる面が多かった。そこで継続的な営みの中で、子供達が持っている知恵を出し合い、助け合って、困難を切り抜けていける内容を持った活動を行うことにより、心身の発達を培っていくらと願い続けていた。

そこで、本年度は子供達自らが育ってきたふるさとに目を向け、ふるさとの環境資源の中から題材を見つけ出し、ふるさとに学ぶ活動を行ってきた。

ふるさとには限りない教育資源がある。人的に物的に様々な素材がある。それらを活用して一年間取り組んできたことを思いつくままにまとめてみた。A子という一人の児童の変容の姿も含ませながら、その事例を以下述べてみたい。

## 2 計画をたてる

6年生の新学期が始まった4月のことである。

一人の男子児童が、

「先生、これ土器じゃないですか。」

と言って、2～3個の土器の破片を手にして登校してきた。

その土器には縄目の文様が入っており、多分縄文期の物であることが予想できた。児童の拾った場所は、市の文化財総合調査年報により縄文期の中井遺跡（足利市松田町）の跡地であることがわかった。

学級全員で出かけようということになり、地主の方への連絡と承諾、市文化財保護課の許可（土器は表土に露出したものをとる。掘ってさがしたりしないこと。）をいただき、さっそく実施した。

現地に着くなり、2～3cmの大きさの土器をさっそく見つけ出す児童がいた。

「ここにある。」

「これ土器かな。」

などと語りながら、一人で5個も見つけ出す児童もいた。

なかには、石の積まれたところから石斧を見つけ出し大喜びをしていたものもいた。

教室で縄文人の暮らしについて話し合っているうちに、住居づくりをしてみたいという声が高まってきた。

竪穴式住居を建てる場合、用地の問題、建てる材料、建て方の学習が問題として出てきた。

用地の問題は校長先生にお願いして、体育館の西側を提供していただいた。

建てる材料は、子供達の

「山に行けばいくらでもある。」

と言う声に期待を持つことにした。

建て方については、県立図書館等で説明文の書かれた書物をさがすこととした。

次に、この活動が、子供達にどんな意義をもたらすのか考えてみた。

① ひとつの物をみんなでつくり出すということを考えると、木を切ったり、かやをとったりして、建てていくのには、一人ではできない。そのため、互いに協力し助け合うことの大切さが体験できるのではないだろうか。

② つくっていく過程で、たくさんの方々の協力をいただくことになるだろう。

地域の方々とのふれ合いを通して、先人に学ぶことの大切さも体験できるのではないだろうか。

③ 家をつくるなどまったく初めての経験である。建て方などは知らない。

それらを学んでいく中で、説明文を読み通したり、設計図を書いていたり、実際の大きさを測ったりしながら、様々な能力を培うことができるのではないだろうか。

以上のようなことからこの活動の意義をおさえてみた。

また、本校のめざしている本年度の努力目標のうち、

○思いやりがあり、だれとでも仲よく協力する児童の育成

○進んではたらき、根気強くやりとげる児童の育成

という二点について大きくかかわってくるものであることを踏まえ「ふるさとに学ぶ」活動を「ゆとりの時間」活用の柱として実践していくことにした。

以下の計画は年度当初のものに実践のあゆみを加えたものである。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
活動内容	ある さと とに 学ぶ よ る	縦穴式 住居づくり	見学 ・中井遺跡 ・宮前遺跡 ・市歴史資料室 ・古代村	看板た づる くを り守 る	(土器づくり) グループによる活動 ・蚕を育てる ・松田小の木 ・松田川の水生昆虫 ・松田の「ちょう」 ・松田に残る言い伝え	かやとり 屋根ふき	完 成	卒業制作	卒業	①版はり ②本「ふるさとに学ぶ」づくり		

### 3 「ふるさとに学ぶ」 [堅穴式住居づくり] (その1)

……実際に活動していくなかで変容していったA子の姿も述べていきたい。

A子は学級の中で疎外されやすい児童であった。何事についても反応が遅くなりがちだ。ふだんあまり話すこともなく、放課後になるとすぐ家に帰り本を読むといった状態が続いた。

本の音読には味わいがある。その書物の中に溶け込み、主人公の人となりをとらえて読む。良い点を伸ばし、クラスの仲間として自然に打ち解ける関係になってくれたらと願った。

子供達も教師も初めて体験することである。材料や建て方等一応イメージは浮かぶがはっきりとした理解はしていない。

子供達の中からは、

「昔の人々も建て方など知らなかったと思う。」

「あっちの方で建て、こっちの方で建てていくうちに、自然とおぼえていったのではないか。」

などの声が聞かれてきた。

一度しか子供達にとって経験できないことである。そこで市販されている本を捜し、説明文を読み合わせることにした。

#### (1) 説明文を読む

捜しあてた図書は「縄文人は生きている。」(有斐閣出版)。児童の代表と県立図書館へ出かけ、図書目録カードから捜しあてた。少々難解な用語もあったが、それは、学級のみんなで調べていくことにして、「学級の時間」(松田小では週2時間あるゆとりの時間)を利用し読み深めていくことにした。

A子は文章を味わい深く読む。ここでも一語一語ていねいに読みこなしてくれた。聞く者にとってほんとうに理解しやすい読み方であった。この力を他の児童が模範とし、読み深めてくれるようになったらと思えてならなかった。

#### (2) 堅穴を掘る

本で調べていくうちに、堅穴の大きさにはたくさん種類があることがわかった。

大きいものでは直径20mにもおよぶものがあるのに驚いていた。

校長先生に計画を見ていただけ、校内に用地の提供をお



願いした。体育館の西側を使わせていただくことになり、さっそくどれくらいの大きさの家が建てられるか実測してみた。

建物を建てるということで消防署にも教頭先生からお願ひしていただいた。

体育館から少くとも3m以上離すという条件で考えると、敷地の直径が約4mと限られたのでその大きさの住居を建てることになった。

縄文期の人々が竪穴を掘るに使用した道具を作ることは、時間的に無理があるのでスコップを使った。竪穴の大きさを測るのには算数の円の面積や円周を求める体験的な学習となった。また深く掘り進んでいくうち、容積を求める学習にも結びつけることができた。

こうして深さ約30cmの竪穴を約一週間あまりで掘ることができた。

### (3) 森の話を聞き、木をいただく



池森宏三郎氏にお願いした。氏は、もう三十年以上も林業に携わり、いわば山仕事のベテランである。理科の学習「林や森の植物の育ち方」のまとめの段階と合わせ木材をいただく日に「森林のはたらき、そして山仕事」という題で話をいただいた。「杉の木を育てるのに約40~50年かかる。もっと大きく育てようとすれば百年はかかる。その間に何度も間伐をして毎年下草を刈る話。そして森林の持つ役割のこと。」など、山仕事の苦労を折り込みながら実際に現地で話をしてくださいった。

薄暗い森の中。太陽の光を浴びれる葉は緑色に茂っている。しかし一步その中に入ると枝は枯れ、下草もはえていなかった。A子は、その中で「気味悪い。」と他の児童とこわそうに語り合っていた。かすかに草が生えている場所を見つけ、何の草かたずねてきた。「しゅんらん」であったが、わずかな光をあびて生えていることに驚いた様子であった。

子供達はいただいた木を学校まで何本も、いく度となく運んだ。

### (4) 木を切る

いただいた木を適当な長さに切る活動が始まった。

3人づつグループを組み分担して行った。木を一本一本切るのに様々な語り合いをしていった。

A子は木を押さえる役をしていたが、自分の体重で押さえつけてしまうので、切っている児童が切りづらくなってしまう。他の児童から強い調子で、

「もっとあげてよ。」

と声がかかったが、A子は、

「はいはい。よいしょと。」

と持ちあげていた。

以前のA子は、ここでためいきをつき作業から身を引いてしまったり、「うるさいね。」といった表情で対処していたであろう。しかし、A子は笑顔で応えていた。

一本めの木を切った時、A子は飛びあがって喜んでいた。

その後、木の切り方はB男が得意だというので、みんなB男に教わることになった。

みんなB男のグループを囲み、木の押さ方、切り方等体全体を使うというやり方を教わった。ちなみにB男は材木店の子であり、将来父親の仕事を継ぐという児童である。

この子供達のやりとりを見ながら感動した。何げない、ごくあたりまえのやりとりかも知れないが、一つの集団としてふれ合う姿に言い知れぬ感動をおぼえたのである。友と心をかよわせていくこうとするA子の姿。みんなに、説明するB男。そして囲みあって聞こうとする仲間の姿が印象的であった。

## (5) 柱を組む

いよいよ切った木を組み柱をたてることになった。

子供達の顔に輝きが見える。ひとつことを成し遂げようとする満足感であろうか、説明文を読みながら立てていった。春、子供達は矢場川にある古代村を訪ねている。

そこで村長の新井さんから立てる時の工夫することなど聞いており、その体験が役立った。

バランスを取りながらしゅろ縄を使ってしばっていった。

きつくしばり、人間が筋にのってもゆり動かないようにしていった。

横の筋となる木をしばりながら、A子も真剣に取り組んでいた。

横木に足をかけ、ひもをきつく引いているたくましい姿

が印象的だった。人前に出ることよりも、人の後からしかたなくやっていたような以前



の姿がまるでうそのように思えてならなかった。

屋根にふくかやは、冬期の乾燥したものを使用したい。そこで、11月下旬までしばらくの間、堅穴住居づくりは中断し、次の活動を始めた。

次に夏期から秋期にかけて実施した活動を抜粋して紹介する。

#### (6) 「ふるさとに学ぶ」活動 その②

##### ①「蚕を育てる」

地域で古くから行われてきた産業に養蚕があった。

その昔、この地域では足利でも指折りの養蚕地域だったのである。

しかし、今では6軒ほどの農家が、副業として営んでいるのみとなってしまった。

そこで、子供達の中から希望者（4名）を連れて幼い蚕を育てる共同飼育所を訪れた。直径1mmほどの蚕を見るなり、子供達は一様に驚きの声をあげていた。

飼育所の方の話をうかがいながら、

○一年間に五回育てること

○昔の養蚕業と今の養蚕業の違い

○毎日の仕事の苦労

など、聞きとっていった。

すると、飼育所の方から「学校で育ててみないか。」ということで、少し卵をわけてくださるということになったのである。

子供達は、全員やってみたいということになり、校長先生から許可を受け、初めての試みをすることになったのである。

1ヶ月あまりの間、子供達はたいへん苦労したようである。

C子は、その時、国語の詩の学習で右のような詩を書きあげた。

自分達で蚕を育てることにより、養蚕農家の苦労を体験していった。

雨の日も桑くれを休むことができない。部屋の汚れの掃除もたいへんだった。

こうして、真白なまゆを手にした時、子供達の喜びようはこの上ないものであった。

その体験を毎年本校で製作している「文集松田の子」にも書いている。

「桑くれ」 C子

毎日毎日、遠い所まで桑とり

毎日毎日、たくさんの桑の量

雨の日も桑をとりに行き

かいこに桑くれ

切りきざみ、大きくなると1日30キロ  
それが毎日毎日続いた。

朝くれてお昼にはなくなっていた。

「どうしょう。」とこまっていると  
青木さんが運んできてくれた。

うれしかった。

とてもうれしかった。

子供達の生活の視野を広げる活動になったように思う。

② ふるさとに伝わる言い伝えを集めよう。

A子はこのグループに入り活動をした。男女あわせて9名と多い。

地域の70才以上のお年よりにアンケートを配り、そこから聞き出した話を本にしようということになった。

土曜日を利用し、午後の時間思い思いに話集めをしていった。

見ず知らずの人々にお願いする場合もあるだろう。そんな時どんなお願いをするのか、とても心配だった。

しかし、予想に反するかのように、月曜日にその時の様子を語る子供達の顔が生き生きとしていた。

ある家では、

「よく来たね。」

と、お茶まで入れてくれ、昔の学校のことを話して下さったり、

「おこづかいまでもらってきちゃた。」とはしゃいでいたり、そんな姿がほんとうにうれしそうだった。

A子も、仲間の子供達とその時の様子を明るく話していた。

また、日記に、家のおばあさんから聞いた話を次のように書いている。



うちのおばあちゃんの通った学校は、樋口魚屋さんの家の裏にあるそうです。

わら屋根の家ですって。

そこへ通うのに、ふろしきにべんとうを入れて、うんと歩いたんだって。家に帰ると水くみだの畠の手伝いだのいろいろやったそうです。 (原文のまま)

A子はいつも家でかっている猫のことを日記に書いていた。また家に帰るとまんがの本を読んでいた。おばあさんの語らいを、この活動を機に広げていってくれたらと思えてならなかった。

昔の学校のこと、長石林道のこと、平忠綱の話など、たくさんの話をまとめ、学芸会の時、本にして父母やお年よりに配った。

ふるさとの言い伝えなどを初めて聞いた子供達。

たくさんの中り合いができた。今まで見ず知らずの方だったので、会えばあいさつ

を交わすようになった。私は、この知り合い感情が形だけではない心からの「あいさつ運動」につながっていく本質のように思えてならない。

#### 他に活動したグループ

「松田に住むちょう」 「松田川の水生昆虫」 「学校にある木」  
「縄文式土器づくり」 ……全員でやる。

#### (7) 壁穴住居を完成させる 「屋根ふき」

11月も中旬を過ぎ、乾燥したかやが取れるようになった。

一棟の住居を建てるのに使用するかやは、2トントラックで約10台分：リヤカーで考えると15～20台分ぐらい必要になってくる。その量の多さにびっくりしていた子供達であったが、学芸会を間近に控え、学芸会で発表しようという意気込みが心の支えとなり、5回ほどかや集めを行い屋根をつくる準備が整った。

そのなかで、子供達の親がとってきたと言って、リヤカー1台分ぐらい持てて来て下さった。

とてもありがたいことだった。

集めたかやを柱のまわりに少しずつたばねながら上へ上へと積みあげていった。

いちばん上の所を二人の児童がしばった。他の子供達もその瞬間を見守っていた。

そして、とうとうできあがった。  
21人の知恵と協力でつくりあげた壁穴式住居。……学芸会の折、地域の方々に公開した。



#### 4 おわりに

「ふるさとに学ぶ」活動を通して学んだことをいくつか述べてみたい。

まず、子供達が様々な活動に取り組んでいくうち、国語や算数などの各教科の学習との関連が生まれ、教室での学習への意欲づけになったことである。

本文中にもその点いくつか述べたが、意味のわからぬ言葉があれば国語辞典で調べたり、ちょうの住む木を調べるのに、百科辞典ではわからず、国立科学博物館へ問い合わせ、適当な書物を紹介していただくなど、学ぶ意欲が高まったことがあげられる。

次に、ふるさとの自然や文化、人々とのかかわりを通して、ふるさとの持つあたたかさにふれることができたことである。

私たち教師一人の力など知れたものである。学校の職員が、地域の方々と協力し、より

よい環境を創り、チームを組んでふるさとの教育風土をつくりあげいかねばならないと思えてならない。

ふるさとの言い伝えを語って下さったお年より、森林の話を子供達にわかりやすく話して下さった方など、人的資源にも大きく目を広げいかねばならないのではないだろう。

そして、もうひとつ、A子という疎外されやすい児童の変容から、実際に体を動かし、話し合い、知恵を出し合って行う学級での一つの活動を通し、よりよい児童理解が子供も教師も得られたことである。

D子は教師との語らいの中で次のようなことを語ってくれた。

最近、A子がおもしろくなってきた。住居を作る時、おばさんみたくよいしょよいしょと声を出したり、子供っぽく笑ったり話していると楽しい。いい知恵を出してくれたりもするんだよね。

子供達のA子を見る目が変わってきたと思う。

互いの良さを見つめあい、個性を尊重する気運を高める学級経営の大切さを痛感させられた思いである。

「ふるさとに学ぶ」……ふるさとには限りない教育素材がある。本市の教育目標の初めは、「郷土の自然や文化に親しみ、その保護発展に努める。」とある。その目標具現のためにも、郷土学習の充実をより一層進める努力を続けていきたい。

## 評

「ふるさと学習は、ふるさとのもつ教育力をよみがえらせるものであります。この実践記録は、「ふるさと松田」の自然や歴史、文化のよさを意図的に教育の場にとり入れ、児童の学習意欲を喚起しながら、「ふるさと松田」の自然や文化を見直させ、よりよい松田を築く創造性に満ちた教育実践であります。なお、この実践は、児童の体験を重視した学習活動圏の拡大を意味する教育活動であります。すなわち、学級における中核的な活動（竪穴式住居を建てる学習）を通して、図書館の利用、説明文の読解、道具の使い方、求積法、等々の学習へと児童の学習活動を広げていったことは、これから教育実践に大きな示唆を与えてくれました。今後とも、地域に根ざした教育を展開する中で、児童の学習活動圏を拡大していくことを一つ一つ、ていねいに積み上げられ、郷土愛や地域の連帯意識を高めていっていただきたく期待をいたします。